遺跡からのメッセージ（21）

イスラエルの遺跡調査 ⑦
日本調査団の原点、テル・ゼロール遺跡

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

三笠宮殿下の尽力と二代真柱の貢献

2016年秋、イスラエルにおける日本の発掘調査団の歴史において、非常に重要な役割を果たされた二人の先人がこの世を去られた。10月28日、三笠宮崇仁殿下が100歳で薨去され、11月29日、小川英雄慶応大学名誉教授が80歳で逝去されたのだ。天理とは少なからぬ縁があったお二方のご冥福をお祈りし、謹んで哀悼の意を捧げたい。新聞各紙の訃報記事でも紹介されたように、三笠宮殿下は、戦後、東京大学宗教学研究室の研究生となって、古代オリエント史の研究に進み、日本オリエント学会の創設に尽力されたほか、1960年～1990年には、天理大学で世界宗教史の非常勤講師を務められた。小川先生は、長く教鞭を執られた慶応大学で古代オリエント史の研究を進め、1996年～2000年には、日本オリエント学会の会長を務められた。小川先生と天理との縁の始まりは、若き日に、研究のために天理図書館を訪れた際の出会いだった。

日本オリエント学会10周年を記念して組織された「西アジア文化遺跡発掘調査団」（調査団長、大畠清東京大学教授）が、イスラエルの海岸平野に所在する小規模な都市遺跡、テル・ゼロールの発掘調査を行ったのは、半世紀前の1964年～1966年のこと。発掘調査報告書『テル・ゼロール』Ⅲ（1970年）の序文では、大畠団長が、発掘調査に際して忘れえぬ方々として、三笠宮殿下が、日本オリエント学会会長として、発掘調査計画の当初から、深い理解と積極的な支援を与え、寄附事業にも率先して奔走されたこと、また、中山正善天理教二代真柱が、日本オリエント学会常務理事として、終始暖かい援助を与え、特に一般の寄附に資金を依った第一次調査が実行できたのは、その経済的援助に負ったことを特筆する。しかしながら、古代オリエント史を専門とする三笠宮殿下、世界のほとんどの国々を旅行した中山正善氏を現地にお迎えするという大畠団長の夢は、発掘調査が3年で終結したことで、ついに実現しなかった。

テル・ゼロールの発掘調査とその出土資料

1964年、実際に、現地に渡航した第一次発掘調査の団員は、大畠団長門下の若手の宗教学者のほか、考古学スタッフとして、東京大学の2名の考古学者、天理から福原喜代男氏（参考館）が加わったが、翌年の第二次調査からは団員の交代があり、慶応大学から地区担当助手として小川英雄氏が、天理大学から測量担当兼写真担当として金関恕氏が新たに加わった（写真1）。こうして行われたテル・ゼロールの発掘調査では、中期青銅器時代（紀元前22世紀～16世紀頃）から後期青銅器時代（紀元前15～12世紀頃）の町を囲む城壁が確認できたほか、後期青銅器時代の青銅器の工房、初期鉄器時代（紀元前11～10世紀頃）の集団墓地などが見つかった。天理大学の関係者が今もイスラエルの遺跡調査に携わり、また、テル・ゼロールの出土遺物が天理参考館の収蔵資料になっているのは、歴史がここに遡るのだ。

写真1　テル・ゼロールの調査団員

今ではありえないことだが、1960年代当時は、協定により、外国隊が発掘した出土資料を折半し、類似資料が二つ以上出土した場合は、その一つを調査団の本国に持ち帰り、所有することが認められていた。テル・ゼロールの出土遺物は、調査終了後、その半分が船便で日本に送られ、当初、東京大学と日本オリエント学会の事務局が所在する東京天理教館の倉庫に保管されていた。その後、1980年、大畠教授の退官に伴い、東大に保管されていた出土資料は、日本オリエント学会の保管分と合わせて、天理参考館に寄託されることになり、資料が天理に運び込まれた。1988年～1995年には、各時代の土器など122点が参考館本館で常設展示されていた。そして2003年には、日本オリエント学会から天理参考館にテル・ゼロール遺跡出土資料が一括で寄贈された。

2005年には、天理大学考古学・民俗学研究室と天理参考館考古美術室の共編で、テル・ゼロールの出土遺物の一部を紹介する冊子が刊行された。さらに、2007年には東京の天理ギャラリー第132回展として、約70点の資料が展示され、2009年には、天理参考館第60回企画展「テル・ゼロール遺跡―日本調査隊の軌跡―」として、約100点の出土資料が展示された。2011年には、参考館の考古美術展示室にテル・ゼロールの出土資料が少数ながら常設展示されるようになった。また、テル・ゼロールの発掘50周年となった2014年秋には、ハイファ大学海洋研究所准研究員のエズラ・マルクス博士が、天理大学研究員として滞在し、テル・ゼロール出土資料の熟覧と、発掘調査記録（写真・図面・日誌）の検討を行った（写真2）。中期青銅器時代を中心にした東地中海地域全体の海洋考古学を専門とするマルクス博士にとって、テル・ゼロールは鍵となる重要遺跡だが、かつて刊行された報告書は不完全な概要報告に留まっていて、発掘調査の全容を知るためには、天理に保管されている調査記録を参照する必要があるのだ。

写真2　二代真柱の遺影を囲んで

つい最近、2015年7月8日～2017年2月6日には、天理参考館のスポット展示「イスラエルのテル・ゼロール遺跡」として、約20点の資料が展示された。折しも、ガリラヤ地域の後期古典時代（ローマからビザンチン時代）の考古学を専門とするモディハイ・アヴィアム博士（キネレット・ガリラヤ考古学研究所長）が、招かれて訪日し、東京、京都で開催された講演会のあと、夫人とともに奈良に足を運び、終了間際の2月5日、参考館のスポット展示を見学した。アヴィアム博士は、テル・レヘシュで日本調査団が進めている発掘調査で、ローマ時代を担当し、昨夏の初期シナゴーグの建築遺構が見つかった地区でも指揮を執った共同研究者だ。60年代にイスラエルで開始された日本の発掘調査団のレガシーを受け継いだ現地調査を継続することで、昨年夏は、大きな成果が導かれたのだが、同時に、50年前のテル・ゼロール発掘調査を含め、これまでに日本隊が行った発掘調査の完全な報告書の刊行を求める内外の強い声にも応えていかねばならない。